

## フジモリ大統領と日系社会

稲村哲也

川畑さんにリアルタイムのたいへん興味深い記事を寄稿していただいた。フジモリをめぐっては、私も様々な経験や知見もっている。そこで、やや総論的に、フジモリ政権の流れとそれに関わった日系社会について述べてみたい。

### リマ市の定宿 日系人宅

ペルーに1978年から2年と数ヶ月滞在して主に先住民社会の調査を行なったが、初めの数ヶ月は、ケチュア語講座を受けるためカトリカ大学に通った。そのとき、近くの佐藤エスペランサ花子さんのお宅に下宿させてもらった。それ以来（ペルーには30回以上訪問しているが）、リマ市ではそこを定宿にしている。私が下宿した後、佐藤さんは、中庭を挟んで数部屋を増築し、小さなペンションにした。ペンションには一般の旅行者も滞在するが、息子のエンリケさん、その奥さんも大学教員とういこともあり、ロコミで研究者が多くなり、夏休みなどは小さな研究サロンのようになることもしばしばだ。

エスペランサさんは山形県人の2世で、戦前の日本人学校の教育を受けているので、日本語が達者でスペイン語とのバイリンガルである。世話好きで活動的でおしゃべりなので、みなから「サトウのおばあちゃん」と呼ばれ、親しまれている。私も「サトウ

のおばあちゃん」から息子のように可愛がられ、彼女を通じて、一般のペルー人や日系ペルー人の方々といろいろなお付き合いをさせていただいた。また、ペルーの首都リマでの中流家庭の暮らし、とりわけ日系人の生活や考え方を身近に共有させていただいてきた。

日本ではめったに会わないペルー研究者とペンション佐藤で一緒になる、ということもよくある。（蛇足ながら）東大の政治学者である大串和雄教授とは、院生のころから何度か同宿になり、彼がアレキパ市に旅をした折に、私が親しくなっていたファミリア・タラベラにことづけを頼んだのがきっかけとなって、娘さんのエリサベスさんと結婚した。同じく東大の歴史学者の網野徹哉さんともここでよく一緒になったが、彼は、共通の知り合いのペルー人から「テツヤ・チョコ」（小テツヤ）と呼ばれていた（私が大テツヤ）。彼のお父さんの故・網野善彦先生が増田義郎先生に連れられてペルーを旅した折にもここでお会いした。私はアンデス山中でリャマ・アルパカ牧畜民の調査をやっており、一時リマに下りてきていたのだが、牧民が使っているオンダ（投石縄）の使い方を披露してそれを差し上げたら、とても喜んでいただいた。（超蛇足ながら）この3月に定年退職された日本文化学科の近藤譲二先生が、退職パーティの折に、「…という話が網野さんの本に書いてあった

ので、あなたのことだろうと思っていたよ」と言ってくれました。

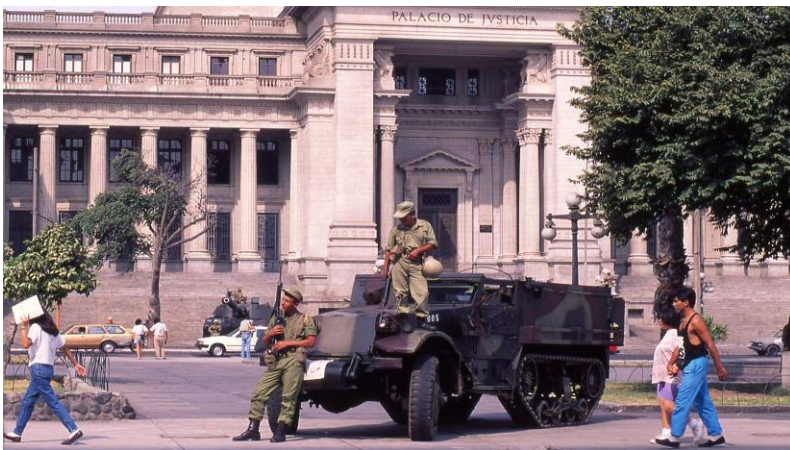
## フジモリ大統領の自己クーデター

1992年4月5日夜半、ペンション佐藤の2階の自室のベッドにいと、息子のエンリケさんがドアをバンバンと叩いて、「テッーヤ、ゴルペー！」と叫んだ。“Golpe de Estado”（国家への衝撃）、つまりクーデターである。階下のサロンに下りると、テレビは放送を中断したところで、ラジオに聞き入った。「戦車が出動して、国会と裁判所を包囲しています。フジモリ大統領による“auto-golpe”（自己クーデター）です。今、この放送局にも軍が入ってきました。放送がまもなくできなくなるでしょう・・・」とアナウンサーが絶叫して、放送が途絶えた。たいへんなことになった、(日曜日の真夜中だから)日本大使館も把握していないかもしれない、と思い、スタッフに電話した(それが誰だったか忘れていたが、電話の相手が川畑さんだったことを、先日、本人から聞いた)。それから、朝日新聞と中日新聞の友人に国際電話を入れた。それが日本への第一報となったため、その晩は朝まで、日本のメディア各社から電話が入りっぱなしとなった。

大統領就任以来、経済再建と国際金融市場への復帰を最優先課題として超緊縮政策を断行し、ようやくその成果が出ていただけに、この強権発動

は唐突な印象を与えた。フジモリ氏はその直前の3月に日本を公式訪問して、支援も取りつけていた。フジモリ氏の名古屋訪問の際には、「通訳を雇う費用がないからやって欲しい」とペルー大使館から頼まれたので、無謀にも大統領記者会見の通訳を引き受けたのだった。

名古屋でフジモリ氏自身と会ったばかりだったので、突然の強権発動に驚くとともに、自己クーデターがそれまでの成果をすべてご破算にしかねない「危険な賭け」だという懸念をもった。実際、国際社会は直ちにフジモリを避難し、米国は人道援助を除くすべての援助の停止を発表した。しかし、この非常手段のあと、国民の支持は80%を超えた。「少数与党であった議会がことごとく改革案を廃案とし、司法が腐敗してテロ分子や麻薬組織を公正に裁かない」という強権発動の理由に、国民が理解を示したのである。日本では、想像がつかないことだが、当時は、刑務所の中で極左組織センデロ・ルミノソのメンバーが党の制服を着て、隊列を組んで行進する写真が報道されていた。捕まってもいないメンバーが刑務所の中で目撃されていた(地下道が掘ら



自己クーデターによる「最高裁判所占拠」

れており外からも自由に入れた。逮捕者が脱獄しないのは、ピストルで脅され札束で買収された裁判官が無罪にしてくれるので、その必要がなかったからだ。

フジモリは、非常体制下で次々と経済改革を進め、幸運にも極左組織「センデロ・ルミノソ」の首領グスマンを逮捕し、つづいて逮捕者・投降者は1万人に上り、組織を壊滅に迫らせた。12月には制憲議会選挙で多数を確保し、翌93年10月に新憲法が国民投票で承認された。その過程で、日本政府はめずらしく独自外交をとり、態度を留保して、フジモリ政権に早期の再民主化を促した。

「勇気があるが頑固者」と言われていたフジモリ氏の真骨頂が発揮された時期だったと思う。ペルーのマクロ経済は約13%という世界最高水準の伸びを記録し、インフレも抑えた。払拭していた外貨準備高も60億ドルに回復した。大統領就任時には、誰の目にも不可能と思われた八方塞がりの悪循環を見事に断ち切ったのである。1995年の大統領選挙の結果はフジモリ氏自身の予想を超える圧勝だった。

### フジモリ政権誕生前夜

ペルーは本来自然に恵まれた豊かな国である。しか

し、1980年代の後半はものすごいインフレと不況が重なるスタグフレーションに陥った。極左組織が拡大し、山岳地帯の先住民社会の多くがその影響下に入るという状況になった。経済・社会の破綻の元凶は、無計画な経済政策の結果200億ドルの累積債務を抱え、利子の支払いも困難な国家破産状態に陥ったことである。経済の破綻は、1968年にクーデターによって政権を取ったベラスコ将軍による軍事政権時代に端を発したと言える。ベラスコ政権は、16世紀以



リャマのキャラバンの旅をするアンデス牧民（先住民）



アンデスの農民（先住民）

後のスペイン植民地時代に遡る少数の大地主と企業家による富の独占に終止符を打つため、農地改革や企業の国有化、外国企業の接収など左翼的政策を断行したが、資本の逃避やコオペラティーバ（農業組合・集団農場）の農業不振などを招いてしまった。

その後ベルムデスが引き継いだ軍事政府は、事実上政権を投げ出し、1980年に民政移管が行われ、ペルー史上初の普通選挙が実施された。そのとき、私はちょうどアンデスの先住民社会で現地調査を行っていた。投票箱が、軍人によってリマから車で3日間、さらに馬で1日の行程で運ばれてきた。ピカ村の日干しレンガ造りの郵便局が投票所となった。村に住む農民のほか、高原地帯でアルパカを放牧する牧民たちが、標高4500メートルの高原から1日、2日と歩いて下りてきて、生まれて初めて投票した。先住民はそれまで、税金を払うこともなかったが、国が何かをやってくれることも期待したことがなかった。選挙の意味もあまりわからなかったが、「義務投票」（投票しないと罰金が科せられる）ということで、みなが選挙にやってきたのだ。

1980年の選挙では、クーデターで政権を奪われた右派政党のフェルナンド・ベラウンデが返り咲き、5年間政権を担当した。自由主義政策をとったが、政権末期には経済破綻をきたし、極左勢力を台頭させてしまった。次の1985年の選挙では中道左派のAPRA（アメリカ人民革命同盟）党の32歳のアラン・ガルシア（2007年から再び大統領）が、そのカリスマ性によって勝利をおさめた。しかしガルシアは、債務支払いを輸出額の10%以内にするとう一方的に宣言し、国際社会からの孤立を招いてしまった。ポ

プリズム（大衆迎合）と統制経済政策により、政権末期には数千%のインフレを招き、5年間の累積インフレ率では200万%という恐るべき数字となり、実質賃金は10年前の3割に落ち込んだ。そのような経済破綻の中で極左組織が勢力を拡大し、治安も悪化し、国民の不満は極限状況に達した。

1990年、フジモリが大統領選挙に立候補したのは、このような状況の中でのことだった。選挙の数週間前までは「泡沫候補」の扱いだった。フジモリ氏自身も大統領になれるとは思わず、上院議員になるつもりだった、と思われる（ペルーの選挙制度では大統領と議員に同時に立候補でき、実際フジモリ氏は上院議員にも立候補していた）。しかし、政治的には無名の日系人の大学教授（元農科大学学長）が4月の第一回目の投票で2位に入り、6月の決戦投票で、その間の猛烈な反フジモリ・キャンペーンにもかかわらず、「ツナミ現象」と呼ばれた怒涛の勝利を収めたのである。

### フジモリ大統領誕生の要因

「ツナミ現象」の背景には、経済・社会の破綻があり、大衆は蔓延する腐敗と口先だけの既成政治家にあきあきしていた。しかし、フジモリが、特に先住民が居住する山岳地域で圧倒的な支持を得たことに注目する必要がある。中央の政治とは無縁だった「忘れられた人々」は、フジモリをどのように捉えたのだろうか。山岳部でフジモリ支持のキャンペーンをしていたある活動家は「ペルーの歴史の中で初めて達成されたレコンキスタ（国土回復戦争）だ」と述べた。先住民たちは、「話は上手ではないが

正直そうで、自分たちと似たチーノ（アジア系）」のフジモリを「インカ皇帝の再来」に擬したというのだ。たしかに、第一回投票まで、フジモリはほとんど政策を出しておらず、「勤勉、正直、技術」の3つの標語だけで戦った。「勤勉」「正直」はペルーで日系人が培ってきたイメージである。「技術」は日本のイメージである。標語は、「アマスワ、アマヘヤ、アマキヤ」（盗むな、嘘をつくな、怠けるな）

というインカの掟と重なる（その内の「盗むな」を「技術」に置き換えている）。選挙キャンペーン中に、フジモリは先住民の衣裳であるポンチョを着て先住民の社会に積極的に入り、一方で、日本の浴衣を着たポスターなども出していた。ペルーの先住民人口は過半数を占め、しかも「義務投票」であるために投票率がべらぼうに高い。3度目の選挙となり、先住民の国政への関心は着実に高まっていた。彼らは、自分たちの票が大統領を決められることを自覚しつつあった。

## 日系社会の困惑

私は1990年の大統領選挙の2週間前までちょうどリマに滞在していたが、その時まで、ほとんどの人が、保守連合が擁立した世界的に有名な小説家のバルガス・ジョサ候補の勝利を信じていた。だから、日本で、フジモリが2位で決選投票に残ったというニュースに驚いた。しかし、リマ在住の日系人に「すごいことになったね」と電話をすると、返事は一様に沈鬱だった。「ペルー



1990年7月28日 大統領就任の日 家族と共に

人の友人が冷たくなった」「高級レストランから締め出された」など。リマでの白人系住民からの反感が顕在化し、戦前の日系人排斥・略奪、さらに戦争勃発後の財産凍結、日系人指導層の北米への強制収容など、日系移民史の苦い記憶が甦っていたのだ。

決選投票が行われた6月、私はリマに戻って、選挙の動向を身近に見た。都市部では文化人類学的調査手法は役に立たないので、つてをたどってプレス証を発行してもらい、記者として大統領官邸などに潜入した。劇的な勝利を得たフジモリ陣営の勝利集会にも出席した。アンデスの民族音楽フォルクローレが演奏され、「ペルー・ハポン・ウン・コラソン」（ペルーと日本、ひとつの心）のシュピレヒコールが熱狂的に叫ばれていた。しかしその場には、日本人も日系人もほとんど居なかった。

このときのペルー大衆の熱気に、私は一種の危険性を感じ取った。帰国後、「朝日ジャーナル」に掲載した記事（1990.6.29）に、次のようなことを書いている。

「ペルー大衆の日系人に対する一方的な思い入れは、このままでは危険な方向に進む恐

れもある。フジモリが奇跡を起こしてしまったのは、すでに事実である。日系社会がとるべき道は、恐らくただひとつ。決選投票の一週間前、日系人青年部が開催した討論会の結論にある。「もしフジモリが当選した時には、応援しなければならない。フジモリ氏の失敗は日系人全体にかかわってくるから」。そして、成功すれば、それは日系人全体の偉大な功績となるだろう。……政権移譲と共に引き受ける国内問題も山積している。最重要課題の経済再建には海外からの援助が必要だが、そのためには具体的な「ショック」政策（注：国民に大きな負担を強いる緊縮財政など）を確立して、債務支払い体制を確立しなければならない、という閉ざされたジレンマがある。

日本政府や民間からの破格の援助がなければ、アンデスに起こりつつある「奇跡」は砕け散り、インカリ（注：インカ王伝説）に加えて、ハポンリ（日本の王：著者の造語）神話の崩壊が残る、ということになりかねない情勢だ。

### 日系社会のフジモリ支援始動

過去の苦い排日運動の経験から、表立った活動を控えるという行動様式を身につけた日系社会は、当初は、フジモリ氏が大統領に当選することを危惧する雰囲気が高く、選挙では対立候補のバルガス・リョサを推す人が多かった。それは、ビジネスや日系企業との関係の観点から、自由主義経済の再建を第一にあげていたリョサの政策に対する支持でもあった。日本政府もリョサの当選を織り込んでいたた

め、フジモリ氏の当選後もペルー支援の動きは鈍かった。

しかし、フジモリ大統領が誕生すると、ペルー日系人協会はフジモリ支援で一致した。私はフジモリ政権誕生直後に日秘（ペルー）文化会館で開催された、「困窮者救済活動の有志の集会」に参加してみた。そこでは、次のような意見が続出した。「我々日系人は今まで積極的な社会活動を控えてきた。目立たないことを是とし、社会活動は行ったとしても、無記名的にであった。我々は、日本人を祖先に持ち、何よりもまずペルー人である。そうした自覚を持って、これからははっきりと顔を表に出して活動しよう」というものである。

私はその席で意見を求められ、場の熱気におされて、「いまや、ペルーにおける日系人社会のプレゼンスが極めて大きくなった。ペルー国民の日本に対する期待も極めて大きい。それにもかかわらず国レベルでの援助が直ちには期待できない。今、日系人が民間レベルで貧困救援にのりだすことは、フジモリ政権を支えるという意味でも、その重要性は極めて大きい。私も日本からの



1991年7月28日 独立記念日のパレード

側面的支援に尽力したい」と、大それた発言をしてしまった。

フジモリ政権は、政権誕生の11日目の8月8日、ガソリン代の30倍の値上げに象徴されるような、経済改革のための極めて厳しい「ショック」政策を発表した。これは、特に貧困層、低所得層を危機的な状況に陥れた。こうした緊急事態を傍観するわけにいかず、日系社会は実際に「日系十字軍」という組織をつくり、8月下旬から活動を始めた。会長は日系人協会会長（エレナ小波津女史）が兼務し、企画委員会の下に収集、広報、連絡、運搬など九種の実行委員を置き、効果的な活動を開始した。

フジモリ大統領の主張でもある、「今日のための魚を贈る事より、明日のための釣竿を贈る（つまり自立の手助けをする）」ことを活動方針とし、第一段階としては、食糧、調理器具などを収集し、リマ市内各地の共同ナベ（人民食堂）に寄贈した。共同ナベは地域の主婦たちが、共同で（輪番で）炊事に当たり、経費を削減して最低料金で食事を確保するシステムである。

### 日系議員のルシラ・シンサトさん

フジモリ政権の誕生と同時に、3名の日系国会議員が初めて生まれた。さらに、フジモリ大統領の要請により、日系人が次々と、各省、国営企業、その他の政府機関の

要職に就き、大統領の直接任命ポスト数千のうちの一割ほどを日系人が占め、さらに翌年には、運輸、漁業、厚生各大臣に日系人が任命された。フジモリ大統領はもとも既成政党に属していないため、いわゆる「信頼ポスト」に有能で信頼できる日系人を配したわけである。これは、従来であれば、政権党の議員によって占められるポストであるが、それはそれで、党における地位と選挙の論功行質的要素が強くなるため、弊害も少なくない。私は、漁業大臣のハイメ・ソベロ・平良氏と厚生大臣のビク



ワヌコ視察のフジモリ大統領とシンサト議員（左から3番目）

トル・山本氏に合う機会を得たが、両氏は水産技師、医師としてのキャリアを積んだ方で、日本での研修の経験もある。フジモリ政権の人事にはテクノクラート志向と、日本への強い期待が表わされていた。

フジモリ与党「変革90」の議員のうち3名が日系人だったが、そのうちの2名が、アナ金城さん、ルシラ新里さんという沖縄系の日系女性だった。先に述べた日秘会館での集合の音頭をとったのが彼女たちであった。フジモリ政権を支えようという、日

系議員としての強い責任感が感じられた。ルシラさんはまだ一度も日本に行ったことはないとのことだった。また、ルシラさんは、東大アンデス調査団が1960年代にワヌコで発掘に従事したときに大変お世話になった、シマブクロ氏の息子の奥さんに当たる方だった。

ルシラさんは、沖縄出身の父親とペルー人の母親の間に生まれた二世である。首都リマで生まれ、結婚すると山岳地帯のワヌコに移り、夫とともにバザール（雑貨店）を経営しながら3人の子を育ててきた。

ルシラさんはフジモリ氏の妹のロサさんの中学の同級生だった。中学時代の5年間、成績は常に一番、明るい性格で面倒見もよく、人気者だった。しかし、彼女は10人の（異母）兄弟の長女で、大学に行けなかった。結婚してワヌコに移り経済的に独立した彼女の最大の願いは大学に入ることだった。夫を口説いて一緒に大学に通い、バザールの仕事と家事、育児の合間に勉強し、土木工学の学位をとった。

平凡な主婦の運命が「ツナミ・フジモリ」現象で変わってしまった。選挙の前年1989年の11月、フジモリ氏から電話があった。「ルーシー、カンビオ90の議員候補になってもらえないか」。フジモリ氏からの「まるで恋人からの電話のようだった」という電話攻勢に折れて、立候補を決めたのは登録最終日のことだった。ところが、選挙の2週間前、ワヌコで悲惨な事件が起こった。

「統合・開発運動」党の立候補者であった新聞記者ら2人が惨殺された。事件後、カンビオ90党の立候補者4人のうち3人がテロを恐れて立候補を辞退し、残るはルシラさん一人になってしまったのだ。結局、彼女はワヌコの下院議員に当選した。彼女は新人議員でありながら、フジモリ氏の厚い信頼を得て、議会の環境・天然資源委員長の要職にもついた。

ペルーの下院議員は行政、企業などに対する査察権をもっている。が、刑務所の囚人が三日に一度しか食事を与えられていないと聞き、ルシラさん調査をしたところ、役人による横領が明らかになった。警察に捜査を命じたが、買収されているため一向に動こうとしなかった。万事が万事しかりで、明るく気丈なルシラさんも生まれて初めて家にこもって泣いた。そして、大統領に電話をかけた。「アルベルト（フジモリ）、私はもうやっていけない」「ルーシー、政治の世界ではそんなこと序の口だよ」。

政治の世界で正義を貫くことは容易ではないが、増大する貧困層の子どもたちは慢性的栄養失調に苦しんでいる。厳しい経済



議員から知事になったシンサトさん



再建策を強いられているフジモリ政権には、貧困対策のための財源がない。そうしたなかで、フジモリを支えていくのは容易なことではない。覚悟を決めた彼女は防弾チョッキを買った。

## ルシラさんの来日と「ロビー活動」

私は日本に帰ると、ペルーで大見得を切ってしまった手前、ペルー支援の方策を考えた。中日新聞記者の鈴木善太郎氏や名古屋在住ペルー人のルベン・フィゲロア氏(中部大学非常勤講師、鍼灸師、ミュージシャン)らの協力を得て、名古屋ペルー協会というボランティア組織を作ることにした。そして、最初の活動として、まだ一度も父の祖国の地を踏んだことがないというルシラ・シンサト議員を日本に招請することにした。彼女の熱意に対し側面から支援することに大きな意義を感じたからである。日本を知っておくことは議員としての活動にとっても大きな意味があるし、日本との橋渡しの役割を彼女が果たしてくれたら、との思いがあった。

訪日は電話ですぐに決まったが、彼女から「日本の国会における環境問題関係について実状を知りたい」という希望が出された。これはなかなかの難題だった。そこで、私は大学の同級生の伊中義明氏(朝日新聞社勤務)に電話で助けを求めた。当時政治部記者だった彼は「いい人がいるよ」と言って、環境派として知られていた武村正義先生(当時自民党衆議院議員、後

に新党さきがけ党首・大蔵大臣)を紹介してくれた。

驚いたことに、武村先生は滋賀県知事時代に2度ペルーを訪問したことがあり、クスコやマチュピチュ遺跡を訪れ、天野博物館で天野芳太郎氏にも会ったこともあるというペルー通だった。天野博物館は、移民として大成功した実業家の天野芳太郎氏が設立した考古学博物館で、日本の研究者等の活動拠点となってきた。同博物館は、「ペルーの文化遺産でお金は取れない」という芳太郎氏の遺志を継いで、ガイド付きで入場無料で運営している。

シンサト議員が来日すると、武村先生は、自民党本部で関係議員と官僚を集めて朝食会を開いて下さり、シンサト議員はそこでペルーの現状と支援を訴えた。また、竹下登元総理にも紹介していただいた。

さらに、武村先生は「民間レベルでもペルー支援を始めましょう」と言って下さり、



チャリティー公演のため、日本に招へいたファミリア・ロドリゲス(12人家族)

さっそく地元の後援会婦人部にシンサト議員を紹介し、ペルー支援活動を開始することとなった。また、私が企画したペルーの音楽一家「ファミリア・ロドリゲス」日本

チャリティー公演にも全面的協力を約束してくれた。フジモリ大統領誕生以後、ペルーのことが日本のメディアでよく取り上げられるようになったが、そのイメージはテロや貧困などマイナスのものばかりだったが、「ファミリア・ロドリゲス」日本公演は、ペルーの豊かな文化を紹介しながら、ペルー支援を訴えるという趣旨であった。そして、一年半後の1992年7～8月、「ファミリア・ロドリゲス」日本公演は実現し、大成功をおさめた。

JICAの日本人専門家が殺害されるなど、ペルーでのテロ活動が活発化していたころ、武村正義先生から「ペルーに行こうか。センデロ・ルミノソの幹部と会えませんか。話をして説得したい」と言われた。「極左組織のセンデロに会う」というのは危険でばかげた発想だった。しかし、私はこのような発想をする政治家が日本にいることに感動してしまった。危機に自ら立ち向かうのを意気を感じる幕末の指導者のようにも見えた。「うーん。やってみましょうか。武村先生が行くというなら、私もお供します。」と答えて、武者震いしたことを思い出す。しかし、そのペルー行きは外務省の許可が下りず、実現しなかった（後の1997年に、ボリビアからアンデスを縦断して古代遺跡を巡る旅が実現した）。

その後、日本の政治状況もバタバタと変化し、武村先生は、細川連立政権の官房長官、次いで村山内閣の大蔵大臣となった。当時の日本の政治状況も、既成政治からの脱却という様相を呈し、私には、ペルーの状況と重なって見えた。東西冷戦の枠組みが解体し、大きく動き出した世界の構図の中で、ペルーが日本の一歩先を歩いている

ように感じられたのだ。

## 大統領のお母さんとクアンテイ（官邸）へ

シンサト議員の紹介で、フジモリ大統領のお母様にお会いする機会を得た。熊本出身の一世で、畑仕事を続ける気丈な方であった。名古屋ペルー協会が集めた募金は日系人協会を通じて、いくつかのプロジェクトに寄贈した。大統領のお母様に、募金の一部をスサナ大統領夫人が主宰する「孤児基金」に寄付したいとお話ししたら、「じゃあ、一緒にクアンテイ（熊本訛りで「官邸」）に行きましょう」と、気さくに言ってくださった。

自宅前から警護車で大統領官邸に同行させていただいた。護衛はピストルを抜き身で持ち、絶えず周囲を警戒していた。官邸の裏口に着くと、ペルー人の衛視たちが、敬礼して、（日本語で）「オーバーチャン」と呼んだ。日本のモンペ風の服を着た「オーバーチャン」が「宮殿」の中を歩く姿を見て、私は一瞬「おとぎの世界に迷いこんだのではないか」と、目眩を感じた。オーバーチャンは「孫が官邸で一緒に住めというけれど、私はあんなに堅苦しいところはいやだ。だけれど毎日孫にお弁当を持ってくるんですよ」と言った。

スペイン系貴族が政治的実権を握ってきたヨーロッパの宮殿のような大統領官邸に、熊本出身の移民で苦勞して息子を大統領にしたおばあちゃんが入って行き、「孫にお弁当を持って行くんだ」と言って、堂々と歩いてゆく。旧大陸（ヨーロッパ）の前近代を引きずってきたペルーに新しい時代が始まった——そんな象徴的な光景に見えた。

スサナ夫人にお会いし自己紹介すると、いきなり「あなた、デテクトール・デ・オロ（金探知機）が手にはありませんか」と開かれて驚いた。

「この前、図書館で征服者ピサロが書いた古い本を見つけたら、大統領官邸に黄金を埋めたと書いてあったんですよ。大統領に言っても相手にしてくれないんですけどね。ピサロが埋めたインカの黄金がみつければ、ペルーの借金が全部返せるんですけどね。」

冗談とも本気ともつかないスサナ夫人の言葉にも、ペルーが置かれている状況が端的に表われていた。

こうして、長年お世話になっているペルーのために出来ることをやってみようと思った活動は、思いがけず大きな流れとなってしまった。

### フジモリ政権への多角的な視点

すっかり近代化し垢抜けてきたリマの社会と、地方の先住民社会とでは、別の国のような違いがある。フジモリ失脚後、リマでは次のトレド政権がフジモリ批判をくり返したが、政権末期には支持率が1桁に落ち込んだ。一方で、アンデス山岳地域では、今もフジモリ人気は絶大である。以前は政治的に「見捨てられていた」先住民地域にフジモリ氏は頻繁に訪れ、道路や電気を引きインフラを整備するなど、人びととの約束を忠実に守ったからだ。首都のリマからは全く見えないことであるが、フジモリ時代に、先住民の国家への実質的な統合がなされたのも確かである。フジモリ以前と以

後では、先住民社会の行政の質が明らかに変化した（先住民コミュニティには以前は近代的な意味での行政は無かった）。また、フジモリ政権には、植民地時代から引きずってきた腐敗・利権の旧体制からの脱却の期待もあった。ペルーの大衆が、旧体質とは縁のないアジア系エスニック・グループにその期待を託した、という分析も不可能ではない。大統領時代、フジモリが旧体質の政治家全員を敵に回していたことを想起すべきである。

2005年12月に、日本の某所で何人かの知人と共にフジモリ氏と会食する機会を得たが、「私はまた大統領になりますよ。ペルーでは国民が法律です。」と楽天的に語っていた。シンサト元議員（のちにワヌコを含む広域州の知事になった）も、ワヌコ地方で、バザール経営と主婦に戻り、失脚したフジモリ氏の再起を期している。

（私はフジモリ党员でもなければ、人権や民主主義を否定するつもりもないが、）フジモリ氏を断罪するのはたやすいが、ラテンアメリカのような複雑な歴史的背景と社会構造をもつ社会の場合、諸要素を多角的包括的に理解することが重要である。それは、異文化理解、国家間の交流、身近な地域における外国人との共生、さらには日本の社会の将来を構想する上でも、大切なことだと思う。悩める憲法学者の川畑博昭さんに、私もおおいに共感する所以である。

（本稿の一部は、『朝日ジャーナル』、『オラ・アミーゴ』に掲載した記事の一部を修正の上、転載した。）